

翻 訳

「ジョンソン英語辞書構想案（1747）」試訳

（その2）

早 川 勇 翻 訳

試訳その2の改題 『英語辞書構想案』の成立

ジョンソンが書いた構想案の成立については、James H. Sledd and Gwin J. Kolb: *Dr. Johnson's Dictionary, Essays in the Biography of a Book* (The University of Chicago Press, 1955) の詳細な研究があるので、それを紹介したい。

ジョンソンがドッズリー (Robert Dodsley) ら出版業者たちと英語辞書編纂の契約を結んだのは1746年6月18日である。しかし、交渉はそれ以前から行なわれ、ジョンソンは自分の案を大急ぎで書き彼らに提示した。それが、「新英語辞典編纂計画の概要」(A Short Scheme for Compiling a New Dictionary of the English Language) である。この「計画の概要」から次の「構想案」までは、比較的多くの資料が残っていて、その流れを後付けることができるというのである。

この「計画の概要」の元々の原稿は走り書きで、数日で書かれたと推測されている。句読点が異常に多く、用語も荒削りで、誤りもあり、きちんとした形では書かれていない。この概要において、ジョンソンは辞書編纂にともなう問題とその実際について自分の見解を素早くしかしできるだけ体系的に書き留めたいと考えた。この原稿の最後には1746年4月30日の日付がある。それを何人かの人に回覧して意見を求めたといわれる。そこに書き込まれたコメントから少なくとも2人に見せたと考えられている。一人の人物がコメントした点は3つと少なく、それほど重要ではないのでここでは言及しない。もう一人は、ジョンソンの親友であったテイラー博士 (Dr. John Taylor) であろう。ジョンソンは彼に *Irene* (1749) の原稿を送っているし、『構想案』の清書した原稿を託していることから、そうだと推測されている。

テイラー博士はいろいろな点について意見を述べた。語句や表現における変更の提案や一般原理のものの例についてなど約40点である。ほとんどは細かい点でそれほど重要だとは思われない。ここでは次の3つの点について詳しく述べたい。これらは英語辞書の目的や意図とかかわる一般論に関するもので、きわめて重要である。

その第1点は、ジョンソンが収録語彙を語根中心にグループ分けしようとしていたのに対して、完全なアルファベット順配列を強く主張したことである。「構想案」の第26段落にあたる部分にそれへの言及がある。ここで注目すべきことは、ジョンソンがフランス・アカデミーと密接な関係にあったことを示唆している点である。ジョンソンの最初の構想は『フランス・アカデミー辞典』にならい語源や語形成に基づき語根を中心として語彙を配列する予定であったことを示す。意見を述べた人物は、これは不便なのでアルファベット順にすることを強く主張し、そうしなければ学生や外国人に辞書は売れないものになってしまうと述べた。完成した辞書が示すように、ジョンソンはこの人物の意見に従った。

2つ目の点は定義に関することである。「計画の概要」において「他のいくつかの言語を用いて主要な語彙の語釈を行う必要がないかどうかは疑問のあるところである。そのような説明は外国人が本辞書を利用することを容易にするだろう。さらに、他の国々における販売に貢献するかもしれない。」と述べた点である。この部分は削除され「構想案」に含まれていない。その理由は露骨に営利的な言葉であると同時に、多言語辞書編纂がきわめて難しいことに思い至ったのであろう。これによって、ジョンソンは英語辞書本来の伝統のなかで作業を進めることを確認した。

3つ目の点は、「計画の概要」の最後で述べられた引用文に関することである。テイラーと思われる人物は次のように述べている。「すべての用例は意味と文法において完全でなければならない。というのは、そうでなければ、学習者はいかになぜどんな意味である語が用いられるか判断がつかないからである。それぞれの語の最後には、それが用いられる各語句の上品な使用例を配置し、次に誤用例を示すと同時に、それをいかに正し避けるべきかの注意書きも添える。」この言葉の最後はかなり規範的な意味合いが強い。

ジョンソンは意見を参考に、いくつかの点について訂正した。しかし、Sledd and Kolb (1955) の意見によると、彼は全体として意見を述べた人物たちのいろいろな示唆や提案にあまり従っていない。

「計画の概略」に目を通した出版人ドッズリーは、さらに加筆修正し、経費や販売面からも、それを当時文壇のパトロンをもって自ら任じていた政界の大物チェスターフィールド伯に捧げることをジョンソンに勧めた。ジョンソンは必ずしもパトロンの援助を望んでいたわけではないが、ドッズリーの意見に従った。

ジョンソンは「計画の概要」の原稿に独自の訂正や追加も行い、「構想案」へと進む。こ

の「構想案」は印刷され出版されたので、いくつかの段階を踏んでいる。原稿が執筆された時期はチェスターフィールド (Earl of Chesterfield) が主要国務大臣の地位についた1746年10月29日以後だとされる。その年の秋から翌年の冬あたりであろう。「構想案」の自筆原稿は残っていないが、それを助手が清書したものが残っている。「計画の概要」と清書された「構想案」を比較対照し、その相違点を列記している。基本的な構成は変えず、新たに最初と最後に大幅な追加を行い、さらにいくつかの箇所ですべて新たな追加を行った。重要な付加は次の部分である。[] 内には最終的な構想案の段落番号を示す。

- (1) 導入部と結末部において、「構想案」がチェスターフィールド伯宛てに書かれたことを述べた。[1-6, 75-76]
- (2) 語彙収録選択の原理として、『フランス・アカデミー辞典』第2版が活々ながら学芸に関する用語 (Terms of Science) を導入したことを教訓とすることへの言及。[9]
- (3) 綴字における語源主義者と発音主義者の論争に言及し、綴字は極力変更しないとの方針決定について。[17-18]
- (4) 語義に関する段落において、いろいろな「単語の性格」 (characters of words) を説明するための実例について。[56]
- (5) 語義に関する議論の最後で、その議論が取るに足らないと考える人への反論。[59]
- (6) 語彙の分類に関する箇所の最後において、語の純正または適正の問題 (questions of purity, propriety) について编者自身の判断を示すという方針。[68]
- (7) 引用文の選定についてポープの選択を参考にしたこと。[70]

助手によって清書された「構想案」の草稿は、さらにジョンソンによって推敲が加えられた。かなりの追加も行われた。arrive の比喩的意味を解説する長い段落も加えられた。この草稿はもう一度助手によって清書され、再びテイラー博士の校閲を受けた。その後、その草稿はテイラー博士からチェスターフィールド伯へ回覧されることになった。伯爵は8箇所について意見を書き込んだ。ジョンソンはおおむね伯爵の意見を取り入れた。

- (1) ジョンソンが使った *tralatitious* はほとんど使わない語で、*translatitious* のことかと聞いた。そこで、ジョンソンは *metaphorical* という語で言い換えた。
- (2) *Dialect of every Profession* は正しい表現ではないのでないか問われ、ジョンソンは *Peculiar words of Profession* と言い換えた。
- (3) *flexions* は正しい綴りではないのでないか問われ、ジョンソンは *flections* と書き換えた。
- (4) ジョンソンは綴りが同じで発音が異なる例として *flow* と *plow* をあげたが、後の語は *plough* と綴るのでないかと問われ、*brow* の例に置き換えた。
- (5) ジョンソンは *phaenomenons* という複数形を使ったが、*phaenomena* が普通使われ

ているのではないかと問われ、*phænomena* と書き換えた。

- (6) ジョンソンは *bring about* がフランス語の表現 *porter a bout* を元に作られたとしているが、元の表現は *venir a bout d'une affaire* ではないかと問われ、ジョンソンはそれに変えた。
- (7) ジョンソンは「英語の統語法は一般的な規則によってではなく特別な先例によって教えられるべきです。」の例として、Addison の表現をとりあげ、その表現を擁護すべく Davies の例をあげた。これに対して、Davies の例だけで充分かを問いただした。
- (8) ジョンソンは *great* と韻を踏む特殊な例として Rowe の詩のなかの *seat* を取り上げた。これに対して、例として引用すべきではないと述べた。

上記の点はすべて細かい点なので、「構想案」についての伯爵の全体的一般的意見はそれ以前にジョンソンに伝えられているのではないかという推測もある。

チェスターフィールドと少なくとももう一人の人物の意見をもとに、ジョンソンは「構想案」にさらなる加筆や校正を行った。細かい点を含めると、その数は 200 を越えるという。最終点検を済ませ、ジョンソンは原稿をおそらくストレイハン (William Strahan) の印刷所に送っただろう。ところが、この印刷所から出てきた原稿にも、かなりの変更を加えた。特に最後の文を大幅に変えた。実際に最終的な作業を終えたのは 1747 年の 6 月か 7 月だと推測される。そして、『構想案』は 1747 年 8 月初旬に刊行された。最初は 4 つ折り判で、後は 8 つ折り判で出版された。両者はほとんど同じであるが、数カ所異なる。

以下、「構想案」後半の第 31 段落から日本語訳を示す。

— . — . — . — . — . — . — . —

[31] このようにして語源が整備されたら、次に私たちは言語の類推について考察しなければなりません。単語がどこから派生したかを発見したら、それらの語がどんな原理によって統一をとられているか、また、多様な語尾になりいかに屈折するかを調査しなければなりません。英語の語尾変化はほんのわずかしかありませんが、それらがこれまで辞書の執筆者によって注意を払われることはありませんでした。英語の名詞は複数の語尾で変化するだけで、形容詞は比較変化を除いて変わりません。動詞は助動詞がつくことによりいろいろな時制を表しますが、過去時制の場合のみ形が変わります。

[32] 言葉は天から贈られた類推によって形づくられることはなかったというクウィンティリアヌス (Marcus Fabius Quintilianus c.35-c.100 古代ローマの修辞学者) の見解が、私たちの言語にまったく正確に当てはまります。言葉は完璧な均一の状態で私どものところに降りて来たものではありません。言葉は必要によって作り出され、偶然によって拡大しました。それゆえ、それはもろもろの異質な部分から成り、それらの部分は怠慢や気取り

や無知や時には学識によって一つの場所にごちゃ混ぜにしてほうり込まれています。

[33] それゆえ、英語の屈折は決して一定せず、数かぎりなく不規則を許容しています。本辞書において、この点はこまめに書き留められるでしょう。例えば、fox の複数 は foxes となりますが、ox は oxen となります。sheep は単数も複数も同じ形です。形容詞は最後の音節を proud, prouder, proudest のように変化させ比較の形にすることもありますし、ambitious のように more や most のような不変化詞を前に置くことによって比較の形にすることもあります。動詞の語形は非常に多くの変化を受けています。I love, I loved, I have loved のように ed をつけて過去や過去分詞にするものもあります。これらは規則形と呼ばれ、南部を語源とするほとんどの動詞がそれに従います。しかし、多くの動詞はこの規則からはずれ、しかもほかの場合と一致するところがありません。I shake, I shook, I have shaken (詩歌では shook と書くこともあります) と I make, I made, I have made や I bring, I brought と I wring, I wrung のようになります。さらに、ほかにも規則に押し込むことができない動詞がたくさんありますので、文法書から規則として学ぶというよりも辞書から一つずつ学ばなければなりません。

[34] 動詞はさらにその内容によって他動詞と自動詞に区別しなければなりません。この点はこれまで無視されてきましたので、すでに野蛮な表現が私たちの会話に入ってきています。それらの語を厳しく批判して排除しないかぎり、時間が経てば書き言葉にもそれらは侵入してくるかもしれません。

[35] 閣下、最も細部の下位区分においては異なるかもしれませんが、私たちの母語はこのような区分のもとに構築され、いくつかの基本的原理に分解されるでしょう。全体をこう見渡すと、英語の基本的最小要素が物質の原初的構成分子のような堅固さや不変性を獲得し、外観は変わっても本質を保ち続け、変容・合成されても破壊されることのないように願う気持ちを誰が抑えることができましょう。

[36] しかし、この点は語彙それ自体にほとんど期待することができないような特別な性質です。というのは、語彙の創造者である人間と同じく、語もまた力を増しているのであれば、力を失いつつあるというのが一般的だからです。人の手によって時には語の命が延びることもあるかもしれませんが、永遠の命が与えられることはめったにないでしょう。そして、私たちは語の変化をとおして、言語とは人間の作り出したものであるということを思い知らされるのがほとんど常です。人間とはそこから永続や安定を導き出すことができない存在です。

[37] 単語は分離していて連続しないものだとこれまで考えられてきましたが、今では単語もまた統語法すなわち文構成の規則によってほかの単語と様々な関係において並べられるものとしても研究しなければなりません。これまで英語辞書においてこの面への注意が

払われてきたかどうか、私にはわかりません。文法家もこの点ではほとんど助けとならないでしょう。英語の統語法は余りに不確定で規則にまとめることができませんので、個々の単語が最も優れた著述家たちによって用いられる用法を一つずつ検討すること以外に学ぶ方法はありません。このため、私たちは現在の話し言葉の様式に従い、例えば *The soldier died of his wounds.* と言ったり、*The sailor perished with hunger.* と言ったりします。そして、私たちの言語をよく知っている人なら誰でも、これらの前置詞がほかの前置詞に取って代わられたら不快に感じます。しかし、それらとて元々は偶然に振り当てられたにすぎないように思われます。というのは、なぜ *die with a wound* や *perish of hunger* が表現上同じ妥当性をもって言えないのか、その理由を文法書からも理性からも [or reason は後日削除された] 引き出すことはできないからです。

[38] それゆえ、英語の統語法は一般的な規則によってではなく特別な先例によって教えられるべきです。アディソン (Joseph Addison 1672–1719) が次のような文における語彙の言い違いによって糾弾されるのが妥当かどうかを検証する際に、何らかの確立した言葉の法則に拠る所を求めるのは私たちの力ではできません。

The poor inhabitant—

Starves in the midst of nature's bounty curst,

And in the loaden vineyard *dies for thirst*,

(あわれな住人は…自然の豊かな恵みのまっただなかで呪われて飢え、実もたわわなブドウ園のなかで渇きのために死ぬ *A Letter from Italy* 1701)

しかし、私たちは前の時代の著述家が同じ語をどのように使ってきたかについて述べ、彼がその不適切な言い回しの罪を免れることができるかどうか考えなければなりません。その際に、デイヴィーズ (Sir John Davies 詩人, 判事 1569–1626) の証言のもと、アディソンにとって有利となるような同種の文章が提示されることになるでしょう。

She loaths the watry glass wherein she gaz'd,

And shuns it still, although *for thirst she dye*.

(彼女は水の入ったそのグラスをのぞきこんだが、それを嫌っている。そして、たとえ渇きのために死ぬとしても未だにそのグラスを避けている。出典不明)

[39] 語による構成について説明する際に、次の点から考察することが必要です。その単語を核とする一連の表現をとおして、その語が英語に特異な方法で使われている形式をとおして、その語の一般的説明からは漏れてしまう意味において考察します。例えば、動詞の *make* からは *make love*, *make an end*, *make way* (he *made way* for his followers, the ship *made way* before the wind の例のように), *make a bed*, *make merry*, *make a mock*, *make presents*, *make a doubt*, *make out an assertion*, *make good a breach* (裂け

目を直す), *make good a cause* (目的を成就する), *make nothing of an attempt*, *make lamentation*, *make a merit* など多くの句表現が生まれます。その気で本を読めばほかの例も目にとまりますが、余りにも頻繁に現れるのでかえってふつうは気づきません。

[40] さらに大変な仕事が控えています。これらの語と句に簡潔で完全に明晰な語釈を与えることです。その仕事の範囲の広さや内容の複雑さは、それをいろいろ試みた人々がとても苦労したにもかかわらず成功しなかったことに十二分に示されています。語彙を説明するのに同じ言語のなかでしなければならない時に、その困難は一層増します。というのは、しばしば一つの概念にはたった一つの単語しか存在しないからです。そのため、*bright*, *sweet*, *salt*, *bitter* のような語をほかの言語に翻訳するのは容易ですが、それらを英語で説明するのは簡単なことではありません。

[41] 語釈ということになると、ほかに考えなければならない問題がたくさんあります。その一つとして、個々の語によって意味される事物を詳しく説明することが必要か少しのあいだ迷ったことがあります。*baronet* という用語の下に「男爵の次に位置する称号」という説明を与えるのではなく、「准男爵」の由来や特権や地位についてもっと詳しく述べるほうがよいかは疑問です。また、*barometer* の下に「空気の重さを量るための道具」と述べ満足するのではなく、その発明・構造・原理について数行述べるほうが適切でしょうか。前者の説明で式部省の役人が満足し、後者の説明で学者が満足することは期待できません。しかし、普通の読者は普通の利用に十分な説明を望んでいるでしょう。また、こうした要求に何らかの注意を払わなければ、辞書は広く一般に価値あるものとはなりえません。このため、私は語彙に関するものだけでなく事物に関する説明を最も優れた著述家たちに求めることを決意しました。それゆえに、フルティエール (*Antoine Furetière* 1619–1688) フランス語辞書の改訂者の一人にならって、恐らく本辞書は最終的にその著者である私よりも学識があるものとなるのは当然なことでしょう。

[42] 一般の人々に広く用いられている言葉を説明するにあたり、個々の語の意味をいくつかに分け、そのうちで本来的かつ原初的な意味を最初に示すことは必要だと思われま。例えば次のようにします。

[43] *To arrive* は「航海中に海岸に着く」という意味で、*He arrived at a safe harbour.* のように用います。

[44] 次に、それと関連する意味を挙げます。*To arrive* は「陸であろうと海であろうと、何らかの場所に着く」という意味で、*He arrived at his country seat.* のように用います。

[45] 次に、隠喩的意味を述べます。*To arrive* は「望んだ何らかのものを手に入れる」という意味になり、*He arrived at a peerage.* のように用います。

[46] さらに、ある意味とほかの意味との比較によって得られた知見について述べます。

例えば, To *arrive* の根源的かつ語源的意味の結果として, この語は正しくは好ましい事柄を表す語以外につくことはないと言及することができます。それゆえ, A man *arrived* at happiness. とはいえますが, 皮肉の意味を込めるのでなければ He *arrived* at misery. とはいえません。

[47] *ground* は「大地」を指し, ふつう空(大気)や海(河川)と対立します。次の例のように用います。He swam till he reached *ground*. The bird fell to the *ground*.

[48] 次に, それと関連してありますが, 結果として生まれた副次的意味が続きます。ここでは *ground* は「ほかのものの下にあるもの」を意味します。He laid colours upon a rough *ground*. The silk had blue flowers on a red *ground*. のように用います。

[49] さらに, それよりも離れた比喩の意味が来ます。「根拠, 理由」の意味で次のように用います。The *ground* of his opinion was a false computation. The *ground* of his word was his father's manuscript.

[50] 本来の意味や比喩の意味について述べたあとは, それぞれの語が普通一般に用いられているのとは異なる詩的意味をつけ加えるのが適切でしょう。例えば *wanton* は不規則だが恐怖感のない動きをもつどんなものにもあてはまり, 次のように用います。

In *wanton* ringlets curl'd her hair.

(彼女の髪はのび放題でカールし巻き毛となっていた 出典不明)

詩的意味のあとに続くのはくだけた意味でしょう。例えば *toast* は「健康を祝って乾杯される」人を意味するのに用いられます。

The wise man's passion, and the vain man's *toast*.

(賢い人間の激怒と愚かな人間の乾杯… A. Pope: *The Rape of the Lock*, Canto V, 10)

[51] くだけた意味のあとにはおどけた意味が続きます。例えば, *mellow* は仲間と打ち解けていることを指します。

In all thy humours whether grave, or *mellow*.

(真面目であろうとにこやかであろうと, あなたがどんな気分でも。 J. Addison: *The Spectator*, No. 68)

[52] また, *bite* は cheat 「だます」の代わりに用います。

—More a dupe than wit,

Sappho can tell you, how this man was *bit*.

(才人というより間抜け, サッフォーはこの男がどのように騙されたかをあなたに語るができる。 A. Pope: “An Epistle to Dr. Arbuthnot,” 368–369)

[53] そして最後に, 偉大な作家にみられる特異な意味が提示されることになるでしょう。例えば, *faculties* という語はシェイクスピアにおいては「権威者の能力」を意味します。

—This Duncan

Has born his *faculties* so meek, has been

So clear in his great office, that & c.

(このダンカン、生まれながらの温和な君徳の持ち主で、王として非の打ち所がなく… *Macbeth*
1巻7場 16-18)

[54] 形容詞の意味は simple swain や simple sheep のように名詞と結合させた形でしばしば確かめることができます。名詞の意味は、立派な著述家にある the boundless ocean とか the open lawns のような名詞のついた形容詞表現によって明確になることがあります。短い引用によってそのような利点が得られる場合には、引用文は削除すべきではありません。

[55] 一般的に類義語とみなされるような語と語の意味の違いは、注意深く観察しなければなりません。pride, haughtiness, arrogance のような例です。正確で厳密な意味は不正確で散漫な意味と区別しなければなりません。例えば、perfection (完全無欠、完璧) という語についていえば、その厳密で哲学的な意味では、この語は人々にとってほとんど利用できるようなものではありません。しかし、それはしばしば本来の意味から大きく規準が下がっているのです。アカデミー会員はその著作のなかに the perfection of a language という表現を差し挟みました。さらにもし彼らに多少規準を下げる気楽な気持ちがあったならば、自らを納得させて the perfection of a dictionary という表現をつけ加えたかもしれません。

[56] 語の特徴で述べる価値がありそうな点はほかにもたくさんあります。語のなかには能動と受動の意味があるものがあります。例えば fearful は恐怖を与えるか、または恐怖を感じるかの意味で、a fearful prodigy (恐ろしい奇才) や a fearful hare (怖がっている兎) のように用います。人間に用いる語もあれば、物体に用いる語もあります。例えば、生命のあるものについては old という語の反対語として young という形容詞を用いますが、ほかのものについては new を用います。称賛の意味に限定される語もあれば、一方、不承認の意味に限られる語もあります。いつもではありませんがしばしば良い行為に対しては exhort を用い、悪い行為に対しては instigate を用います。これに対して、animate, incite, encourage の場合には善し悪しの区別なく用います。ですから、私たちはふつう ascribe は良いことが原因だと考え、impute は悪いことが原因だと考えます。規律軽視の英語においては、これらの語使用もまたおそらく他のいかなる語使用も、最も正確を期す文筆家によってその意味がしばしばひっくり返されることはないというほど確立したものではありません。それゆえ、文体に関する決まりは法律と同じように頻繁に繰り返されてきた先例から生まれますので、私は両極にある用法の証拠を集め、正当な権利にせよ違

法な強奪にせよそれらの語の主権を長いあいだ保有してきた慣用の定めるところを発見し、それを一般に知らせるように努めます。

[57] さらに、ほかの語との反意によって説明することが必要な語もたくさんあります。というのは、対立関係にあるものは一緒に並べたときに最もよくその内容がわかるからです。例えば、動詞 stand (立つ, 抵抗する) は一つに fall (倒れる) と対立する意味をもち、またほかの意味では fly (逃避する, 逃げる) と対立します。その区別は明白でそれに特別な注意を払わなかったために、あの高名なベントレー博士 (Dr. Bentley) は『失樂園』の次の文章に対してあえてある評釈を行いました、それはまったく無駄になりました。

—In heaps

Chariot and charioteer lay over-turn'd,
And fiery foaming steeds. What *stood*, *recoil'd*
O'erwearied, through the faint Satanic host,
Defensive scarce, or with pale fear surpris'd
Fled ignominious— (Milton)

(戦車も搭乗者もろとも、いや火のような泡をふいている馬もろとも、累々として横たわっていた。サタン麾下の全軍は今ではほとんど防禦力を喪失してしまっていたが、未だ斃れていない者もただ疲労困憊して退却するか、或は恐怖に襲われ、蒼白になって、卑怯にも逃亡するのみであった。平井正穂訳、第6巻、390-395)

彼は「文はこう読めるのですが、ここで私たちは what *stood*, *fled* という表現に気づきます」と述べています。このように recoil'd (退却した, 敗走した) を fled [fly の過去・過去分詞形] と言い換えていることから、彼が変更を提案していることがわかります。しかし、もし彼が辞書を引いて、fall しなかった者が fly したという以上のことは何も確言されないことがわかったら、そのような変更はわざわざ行わなかったかもしれません。

[58] 副次的また付随的だと思われる意味を説明する際に、その意味が持ち込まれた過程を解説するように努めたいと思います。例えば、*eke out any thing* というのは、低級な手を使って物のあるべき次元を越えてその長さを延ばすことを今では意味しています [ジョンソン辞書には To spin out by useless additions. とある]。元々、eke という語は我が国の昔の文筆家が一語加えたいときに、彼らが頼りにするふつうの方便でした。また、*buxom* という語は元々単に「従順な」の意味だけですが、今日ではくだけた表現において「みだらな、気まぐれな」という意味もあります。なぜこのような意味が生まれたかという、改革以前の古い形式の結婚において花嫁は愛想のよさと従順な気持ちを次のような言葉によって約束していたからです。I will be bonair and *buxom* in bed and at board. (私はベッドにいる時もテーブルについている時もおとなしく従順でいます)

[59] 閣下、これらの発言の多くがそれぞれ個別に考察されるのであればとてもつまらないようにみえることを私はよく承知しております。また、このような発言をすると、みだらな怠惰に対して侮蔑的な笑いを引き起こすことになるかもしれませんし、傲慢な愚かさに陰險な批判を加える機会を容易に与えることになるかもしれないことも承知しております。しかし、怠惰を軽蔑するのは容易ですし、しっぺい返して愚かさを嘲笑するのは簡単です。私は、言語文化的研究の困難さや重要性を知らない人々が私の作品について何を思おうと関心はありません。また、まったく何もしてこなかった人々に、ほとんど何もしていないと私を責める資格があるとは思いません。しかしながら、そういった人間に対して、小さいものの集合より偉大なものはこの地球上にないことを思い起こさせ、アラビアの諺にならって一滴に一滴が注ぎ大海が生まれると繰り返して教えるのは不適切でないかもしれません。

[60] 考察しなければならない点でまだ残っているのは、単語をそれぞれ適切な語類にわけることです。これは辞書編纂においてきわめて重要な領域です。

[61] それぞれの学問領域に振り当てられている単語は別として、言語の一般的な部分を構成するすべての語彙は多くの区分や下位区分に分けられます。例えば、世間一般に使われている語、主に詩歌において用いられる語、使われなくなった語、特定の著述家のみ認められるがそれ自体として不適切とはいえない語、風刺劇にのみ使われる語、不純で粗野な語、などです。

[62] 世間一般に使用される語は、特別な点は何もないのですぐわかるでしょう。また、それらの語のいろいろな意味はあらゆる時代の典拠によって支持確認されることになると思います。

[63] 詩歌に専ら用いられる語は、その前につけられる何らかの^{しるし}印によって区別がつくでしょう。また、詩人の典拠以外にはどんな典拠ももたないことによっても詩語だとわかるでしょう。

[64] 古語や廃語は基本的に辞書に挿入されることはないでしょう。ただし、我が言語の黄金時代が始まると位置づけられるエリザベス女王即位（1558年）以降の文筆家の作品のなかにみられる語は除きます。これらの語の多くは収録しないかもしれませんが、次の場合は例外とします。認められ確立した文体だということでも人から読むのを勧められるような書物において、問題が解決されないまま残ってしまうことのないようにと読者がもっともらしく要求する時です。また、古語や廃語については不人気で使わないという注ではなく排除すべきだという注で示します。

[65] 特定の書物にしかみられない単語は、語を用いる人物の名前が一人しか記載されないのかわかると思います。しかし、これらの語は収録されないでしょう。ただし例外は、

妥当性、純粹さ、力強さ、または、その語を用いた文筆家の名声ゆえにその語を受け入れる何らかの特別な理由がある場合です。

[66] なお、馴染みのあるおどけた作品に使われる単語についても、適切な典拠をつけて述べたいと考えています。例えば、*dudgeon* (怒り) はバトラー (Samuel Butler 1612–80) の風刺詩からとられ、*leasing* (嘘をつくこと) はプライアー (Matthew Prior 1664–1721) の作品からとられるでしょう。これらの語はその違いがわかる印によってきちんと特徴が示されるでしょう。

[67] 粗野であったり純粹でない単語や表現は、どこで見つかるうとも注意して根絶しなければなりませんので、何らかの悪い刻印を押されるかもしれません。ところが、それらの語は一流の作家においてさえ、しばしば見られるのです。例えば、ポープ (A. Pope 1688–1744) の作品に次のようなものがあります。

—*in endless error hurl'd.*

(終わることなき心の過ちに翻弄されて。 *An Essay on Man*, Epistle II, 17)

'Tis these that early taint the female soul

(早々と女性の魂を汚すのはこれらだ *The Rape of the Lock*, Canto I, 87)

またアディソンの作品にも見られます。

Attend to what a lesser muse indites.

(もっと劣った詩神ミュージが創る詩に注目せよ。 出典不明)

さらに、ドライデン (John Dryden 1631–1700) にもあります。

A dreadful quiet felt, and worsen far

Than arms—

(恐ろしい静寂が感じられた、戦闘よりもはるかにおぞましい… “*Astraea Redux*,” 4)

本辞書においてこの点が十分に達成されるのであれば、フランスのボアロー・デプレオー (Nicolas Boileau-Despréaux 1636–1711) がアカデミー会員に対して行った提案と同等なものになるでしょう。その提案とは、会員はていねいな表現をする文筆家を一人残らず調査し、さらに彼らの作品のなかにある不純なものを取り除き、その用例が時間的に遠く離れた将来の時点において母語の墮落につながることはないようにしたいというものです。

[68] 純正かとか適正かの諸問題に関して白黒を決定しようとする点において、かつて私は余りにも多くを自らに背負い込むべきではないのかどうか迷っていました。また、問題提起を行いそれについて両論を提示する以上に自分の守備範囲を広げるべきかどうか一時期心に決めかねていました。しかし、貴卿のご意見をお聞きして以来、自分自身の判断を差し挟むことに決意いたしました。従って、私は文法と理性に最も合致すると思われることを擁護すべく努力する次第です。シーザーがオーソニウスは適任だとすでに判断を下し

た仕事に対して、オーソニウスは謙虚な気持ちから自分にはその能力がないなどとは言えないと自分に言い聞かせました。

Cur me posse negem posse quod ille putat?

（彼が可能と考えることを、なぜ私が自分には不可能だといいうるのだろうか。）

それゆえに、閣下の権威は我が言語の面において広く認められておりますので、貴卿が私に自分の判断を公にする権限をお認め下さる以上は、私は一種の代理司法権を行使する役柄とみなされることを期待します。また、私自身の要求であったら到底得られなかったような権限が、貴卿の代理人ということで私に問題なく付与されますことを期待します。

[69] 本辞書のあらゆる部分の信頼と評価に深くかかわる典拠を引用する際に、いくつかの明白な方針に従うのは適切でしょう。例えば、低級の作家よりも一流の名声を得ている作家を優先したり、引用文を正確に転写したりすることです。また、選択が首尾よくなされるためには、例文がすぐに利用できるのに加えて、何らかの言語上の純粋さおよび分別や敬愛についてある規範を示すことにより、私たちに喜びや教えを伝えるような文章を選択するという方針を立てることです。

[70] いろいろな機会に、裁判官を裁くのは誰かとたずねられました。そして、この構想に関して申しますと、いかなる権威によって引用する典拠を選定するかという疑問が当然生じてきますから、その疑念を未然に取り除くことが必要です。このため、証言となる用例を引用することになっている著述家たちの多くは、ポープ氏 (A. Pope) によって選ばれた人々であることをここに明言しておきます。ポープ氏はこの仕事の完成を心配して見守っておられましたので、生きておられれば、私がそれを手掛けたことを喜んで下さったにちがいないと申し上げても差し支えないでしょう。

[71] 作家の年代順に引用例を配列するのは適切でしょう。そして、もし私たちイギリス人が作り上げたのではない語句に対して、それを最初に導入した著述家の名前を付記することができるのであれば、また、もし現在は古くなってしまった語に対して最後にその語を作品に収めた人物の引用例をつけるとしたら、それは心地よい楽しみを提供することになるでしょう。例えば、現在では使われなくなった *scathe* と *buxom* という語には、次のようなミルトンの文が引用されるでしょう。

—The mountain oak

Stands *scath'd* to heaven—

（彼らの立っている有り様は、天雷が火を吹き森の榎（かしわ）や山の松を 平井正穂訳『失樂園』第1巻, 613?）

—He with broad sails

Winnow'd the *buxom* air—

(翼をひろげ、時として、翼を速く揺り動かして 穏やかな空気のただ中を翔けていった。平井正穂訳『失樂園』第5巻、267-268?)

[72] このような方法をとることにより、すべての語彙が歴史をもつことになるでしょう。そして、読者は英語という言語が徐々に変化することを知らされ、ある語が興^{おこ}りある語が減する姿を目の当たりにするでしょう。しかし、とても詳細かつ正確な観察資料が期待されるというよりもむしろ強く望まれています。そして、その使い方が注意深く示されたとしても、好奇心が落胆を生むことは時にあるはずです。

[73] 閣下、以上に述べましたところが、私が考えております英語辞書の理念です。辞書により我が母語の発音が固定化され、その習得が容易になるでしょう。また、辞書により英語の純粋さが保たれ、語の使い方が確定し、言葉の生命は永らえるでしょう。しかし、もしかしたら、諸国民の言語を文法書によって矯正することは行儀作法を道徳的な話をして直そうとするのと同じくらい困難な仕事かもしれません。しかし、次のように願うのは避けられないので、そのように期待するのもまた自然なことです。閣下のご庇護が完全に無駄になることなく、古い時代の作家を保護し現在の作家の質を向上させることに貢献することを期待します。その結果、言語間の特徴的な相違点を理解せず、異質な表現を用いて混沌とした表現様式を作り出してきた翻訳家たちの態度^{ひるがえ}を翻させることに役立ち、また、それによって天才的な人々の関心がより純粋な表現形式に向くことを期待します。天才というのは論証に注意が向き過ぎ文体に無知となりますし、急激な発想ゆえにペルーの激流のように金だけをもたらずの金と砂とを混ぜてしまうことになるのです。

[74] 閣下、私が貴卿の前に提示しました構想案の全体を見渡し、私はその広がり大きさに脅えていることを認めずにはおられません。シーザーの兵のようにブリテン島を新大陸と思い、そこに進攻するのはほとんど気違いじみていると考えたのと同じ心持ちです。しかし、私は期待しています。征服を完遂するはずはありませんが、私は少なくともその海岸を発見し、そこに住む住民の一部を教化し、あとに続く冒険的な人物がより深く進み住民らを完全に服従させ彼らを法のもとに置くことを容易にするでしょう。

[75] 私たちはあの偉大なローマの予言者にこう教えられています。すべての人間は自らに対して第一級の優秀さを身につけたいと望むべきですが、名誉をもって第二または第三のところまで留まることもあるかもしれません。そのように、私の成し遂げる仕事は他の辞書の素晴らしさに比べその下に位置するでしょうが、私には地道に努力したという賛辞が少なくとも与えられるかもしれません。また、集団で取り組んだアカデミー会員や綿々と続く学識ある辞書編纂家たちとの戦いから私が勝利を手にするのではなく身を引いたとしても、私の勤勉さに対するいかなる叱責の理由ともならないだろうと考えます。気持ちが最も高揚している時でさえ、とても長い仕事のあいだずっと私がかんがいの注意を保つことな

ど、期待できません。時には怠慢となるでしょう。また、しばしば無知によって過ちをおかすことがないように、すべての部分について十分な知識が得られるとも期待できません。私はいろいろなことを懸念したり心配しています。私は正確さを求める気持ちからささいな点にまで入り込まなければならないこともあるでしょう。冗長を恐れるあまり必要な部分を切り捨ててしまったりすることもあると懸念します。内容の多様性が広がれば広がるほど私はしばしば心を惑わされるのではないかと、とても込み入った迷路の中でしばしば足をとられるのではないかと、ある箇所では精細さが度を越し正確さを欠くのではないかと、またほかの箇所では証拠が増え過ぎて明確でなくなるのではないかと心配しています。そういう心配はあるものの、私は次のような方々からの賛辞を諦めてはいません。その方々とは、推測の不確かさ知識の少なさ記憶のあいまいさ注意の不確かさを理解しつつ、誤りの原因とそれを回避する方法を照らし合わせ、なおかつ学問的広がりと人間の能力とを正しく見比べることができる人々です。また、私の努力の結果がいかなるものであれ、このように私を公の前に出る名誉を与えていただいたこの試みをたやすく悔いることはないでしょう。

閣下

貴卿の最も柔順で最も卑しい下僕、サム・ジョンソン